今回の学部だよりは、平成20年・21年度に行われた学部教育活動の一端と先生方のご活躍について報告いたします。まず、岡崎裕子先生・三宅奎介先生・坂口希巳子先生からは「インターンシップⅠ」への取り組みについて学生アンケートを通してのご報告、岡佐智子先生からは21年度開設の「幼児教育センター」のご紹介、大倉孝昭先生からはWBE（Web Based Education）2009における最高賞受賞の、そして桜井智恵子先生からはオンブズ8サミットに日本の代表として参加されてのご報告を、それぞれ頂戴することができました。

〈学会誌担当：大槻〉

インターンシップ報告－「教育福祉インターンシップⅠ」アンケート結果より－

岡　崎　裕　子　　三　宅　奎　介　　坂　口　希巳子

本学部では、3年次以降に履修する「教育実習」以外に、教育・保育現場を実際に体験し、子ども理解や教職への意欲を高めることを目的としたフィールドワーク型体験学習の取り組みがいくつかあります。1年次を中心とした「トライアル・ウィーク」や「教師のお仕事入門講座」、2年次から各年開講の「教育福祉インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ」、その他「学校支援学生ボランティア活動」など学年進行に応じて設定されています。

なかでも、インターンシップは昨年度初めて「教育福祉インターンシップⅠ」として単位化され（正課）、来年度には最終学年の「教育福祉インターンシップⅢ」の設置で出揃うことになります。「教育福祉インターンシップⅠ」は1つの学校・園で連続して実習する集中型（9月または2月実施）、「教育福祉インターンシップⅡ」は特定の曜日・時間の活動を継続し、年間32時間以上実習する長期型です。

今回、インターンシップ体験がどのように捉えられているかを把握するため08年度のアンケートを実施しました。結果の概要を一部紹介します。

Ⅰ　方法

1　対　　象：小学校または幼稚園での教育実習を本年度履修した学生。昨年度のインターンシップ配当学年である現3回生を今回の分析対象とした。平成21年7月「教育実習指導」授業時に用紙を配布し、終了時に回収した。

［有効回答：216名（小学校　124名、幼稚園　92名）］

2　調査内容：教育実習期間、各種体験実習参加の有無、教育福祉インターンシップⅠの振り返り等の質問12項目

Ⅱ　結果

1　Q.「教育福祉インターンシップⅠ」の単位を修得しましたか？

全回答者（216 名）の内

昨年度修得済み	65.3％

今回の調査に回答した学生の 65.3％（小学校実習者の 70.2％、幼稚園実習者の 58.7％）が参加しており、初年度ながらこの科目への関心が高かったことが示された。

2　Q.「インターンシップ（またはトライアル・ウィーク）に行った経験は、教育実習の際の参考になりましたか？」（図 1）

「教育福祉インターンシップⅠ」に参加し、調査時点で教育実習を終了していた 112 名中

とても参考になった	66.1％
少し参考になった	28.6％
あまり参考にならなかった	3.5％
無回答	1.8％

教育実習を経験した後に現場体験実習を振り返った結果、ほとんどの学生が参考になったと評価していた。

3　Q.「学校・園での 1 日の時間の流れがわかりましたか？」（図 2）

「教育福祉インターンシップⅠ」に参加した 141 名中

よくわかった	64.5％
少しわかった	24.8％
あまりわからなかった	5.7％
無回答	5.0％

1 日の時間の流れがわかったとした回答は約 9 割で非常に高く、とくに小学校での体験者に顕著であった。教育福祉インターンシップおよびトライアル・ウィークは、幼児・児童の登校・登園から下校・降園までの時間を子どもたちと共に過ごすことになっている。1 日の時間の流れやそれに伴う子どもたちの様子の変化を実感できる良さがあると思われる。

4　Q.「インターンシップ（またはトライアル・ウィーク）に行った経験は、大学での授業理解に役立ちましたか？」（図 3）

「教育福祉インターンシップⅠ」に参加した 141 名中

はい	67.4％
いいえ	25.5％
無回答	7.1％

「はい」とした 70.5％ の回答者が具体的に記述した。「講義で実際の現場の話を聞いてもピンとこなかったが、理解できるようになった」「想像でしかなかった児童像が具体的なものになった」「子どもには個人差があることがわかった」「授業の流れ、板書方法がわかった」「特別支援教育の授業で、支援が必要となる児童に対しての支援の仕方等がよくわかった」「教師になりたいと強く思ったので、どの授業にも真剣に取り組もうと思うようになった」など各自の学びが多様に記述されていた。

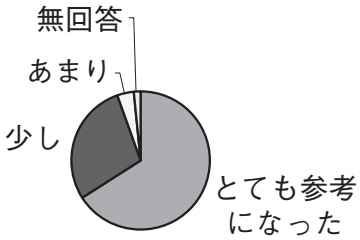

図 1「教育実習の際の参考になりましたか」

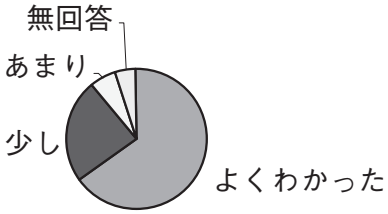

図 2「学校・園での 1 日の時間の流れ」

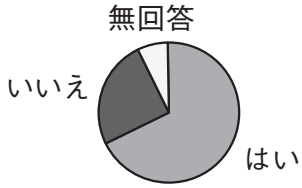

図 3「大学での授業理解に役立ちましたか」

以上今回の調査では、教育実習前に履修したインターンシップは概ね好評であり、本人にとって貴重な体験になっていることが推察されました。今後も理論と実践をつなぐ機会として、種々の実践体験にトライしてください。実践の場に出向く時は真摯に、誠実に、積極性をもって学習するよう期待しています。

幼児教育実践研究センターが開設しました

岡　　佐智子

幼児教育実践研究センターが開設しました。開設の背景や今年度事業、および今後についてご紹介します。

大阪大谷大学　幼児教育の歴史

大阪大谷大学は1966年に（旧）大谷女子大学として開学し、1970年には幼児教育学科を設置しています。幼児教育40年の歴史があります。その当時、幼稚園教諭というと二年制の短期大学を卒業した人がほとんどでしたが、大阪大谷大学は始めから四年制の養成課程を修了した教員を送り出していました。現在では、多くの卒業生が園長や主任といった要職につき、各地で活躍しています。また、1988年には保育士（旧保母）養成課程を設置、幼稚園教員と保育士の両方の免許・資格を有する専門性の高い保育者を養成することになりました。同じ年には近畿圏でも数少ない特別支援学校（旧養護学校）教員養成課程も設置し、保育者を志望する学生たちにも幅広い視野を持って学べる機会を提供してきました。いずれも幼児教育に携わる人材養成としては、先駆的な動きでした。

現代の幼児教育をめぐる背景

社会の変化は子どもの育つ環境にも大きく影響しています。幼児教育でも、少子化や情報化、生活体験・自然体験の減少など子どもの育ち方が以前とは異なってきていることに加え、虐待や育児力の低下など子育てをめぐる問題も取り上げられるようになってきました。これらの幼児教育の課題は、幼稚園や保育所などの保育現場だけでは対応しきれないものであり、国の幼児教育に関する指針でも各地域で幼児教育を支援する拠点機能（センター機能）をもつ施設の必要性が指摘されています。また、養成校の学生に対しても幼児教育現場での体験や現職保育者との意見交換の機会などを積極的に提供することが求められています。幼児教育40年の歴史を持ち、常に先駆的な養成教育に取り組んできた大阪大谷大学としても、こうした幼児教育をめぐる課題に対応しないわけにはいきません。そこで、南大阪地域を中心とした幼児教育を支援する拠点として、教育福祉学部に幼児教育実践研究センターを立ち上げることになりました。

幼児教育実践研究センターの活動

南大阪地域の幼児教育を支援し、教育福祉学部の学生・卒業生にも役立つよう、以下の活動を実施していく予定です。

(1) 保育者研修：幼児教育現場で活躍する卒業生を対象とするリカレント教育の場として、南大阪地域の幼児教育を支えておられる幼稚園教諭や保育士の方々を対象とする現職者研修の場として、自主保育等地域で保育を支えておられる方を対象としたスキルアップ研修の場として、幼児教育に関する現代的な課題をテーマとするセミナー等を開催していきます。学生のみなさんも、在学中も卒業後もスキルアップを目指して積極的に活用して下さい。

(2) 発達相談：「ことばの遅れが気になる」・「落ち着きがなく、集中している時間が短い」などの子どもの発達に関する悩みを持つ保護者の方や幼児教育に関わる先生方からの相談を受けていきます。

(3) 子育て支援：子どもを持つ保護者の方を対象に発達相談や子育てに関する情報提供や支援を行いま

す。「早期教育は本当に必要？」・「子どもに早寝早起きが大事なわけは？」・「子どもの心と身体を育てる食事は？」などの子育てにまつわる疑問に答える子育て講座等を開催し、子育てを支援していきます。

(4) 研究：現代の保育課題といえる食育・環境教育・科学教育・特別支援教育などの観点から南大阪地域を対象とした調査研究やニーズ調査を実施する予定です。その結果を保育者研修事業の企画や養成課程の教育内容改善へと還元させます。

(5) 教育福祉学部の教育との連携：学園内の大谷幼稚園と連携して、実習以外に現場を体験する機会や学校外における子どもとの触れ合いの機会、現職教員との意見交換の機会等を作っていきます。

2009 年度事業

2009 年度は発達相談事業の他、下記の 3 つの事業を行い、本学学生や卒業生だけではなく、現職保育者・一般市民の方々にもご参加いただきました。また、包括協定を結んでいる地元自治体、富田林市の子育て支援課との連携により、子育て支援事業関係者の研修事業を共催で行うことが決定しました。内容は、2009 年度と 2010 年度の 2 年にわたり、本学教員による研修を実施するというものです。2009 年度は、1 月 28 日（木）に長瀬美子先生、2 月 24 日（水）に坂口希巳子先生、3 月 19 日（金）に桜井智恵子先生が担当され、富田林市役所において子育て支援関係者対象に研修を実施しました。官学協同で地域の幼児教育の質の向上に貢献できる第一歩となりました。

【開設記念講演　ノッポさんのトーク「小さいひとと関わるみなさまへ」】

2009 年 11 月 21 日（土）　講師：高見のっぽ氏

【幼児のための自然体験指導者養成講座　ムッレ教室リーダー養成講座】

2009 年 12 月 12 日（土）～13 日（日）　講師：高見豊氏・西躰通子氏

【セミナー　幼児期からの性教育を考える】

2010 年 1 月 30 日（土）　講師：徳永桂子氏

幼児教育実践研究センターのこれから

現在は事業を開始したばかりで施設なしでの運営ですが、来年度には教職教育センターのある 3 号館の 1 階がセンター拠点として整備される予定となっています。施設整備にあわせて、事業も本格稼働していきます。南大阪地域の幼児教育の発展のために開設したセンターですが、幼児教育を学ぶ在学生が活用できる場としてもいろいろな取り組みを考えていきたいと思っています。また、卒業後も現職保育者としてのスキルアップを目指す場として活用してもらえるよう企画を考えていきますので、学会員であるみなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

開設記念講演「ノッポさんのトーク」の写真

WBE 2009 における論文発表と 2009 Best Software System Award の受賞報告

大　倉　孝　昭

1. はじめに

平成 21 年 3 月 15 日（日）から 20 日（金）にかけて、タイ王国　プーケット　ノボテル・リゾート・ホテルにおいて Web Based Education 2009（主催：The International Association of Science and Technology for Development）に参加した。遡れば、このプロジェクトは、平成 18 年の秋に研究チームを組んで、19 年度科学研究費に応募したことから始まっている。平成 19・20 年度と連続不採択という辛酸をなめ、捲土重来を期して実績を積みながら、21 年度の応募書類を作成する過程で、同時にこれまでの実績を論文化し国際学会の審査を受けよう、という話になった。11 月初旬に科学研究費の申請締め切りを控え、WBE 用の論文を平行して作成するという強行スケジュールでこのプロジェクトは始まった。共著者であり科研の共同研究者でもある（小山准教授：本学文学部、野口教授：武庫川女子大学薬学部）とメールで議論しながら、11 月初旬に Web ページから英語の論文（A 4 で 5 ページ程度）を送信し、査読を受けることになった。

2. 出発前の事前準備

12 月中旬に 3 名の審査員から“合格”の判定をもらい、論文発表の資格を得た。その中で、“ソフトウェア・コンペティション”への参加者募集があり、我々は“市販の DVD 映画を利用した CALL システムを Web 上に展開する”というコンセプトを掲げて、エントリーした。その後、このコンペに参加するために、新規性・独自性・有用性を述べた別途 3 ページのショート・ペーパーと、デモ用の Web ページ（Web Based Education なので、デモ用の URL を英語の説明書付きで事前公開すること）を用意するように求められた。小生にとっては、査読をクリアーできる英語の論文を書くことも至難の技であったが、その上に、日本人向けに作成した学習者用画面を全て英語に変更し、英語のマニュアルを作らなければならなくなった。さらに、プレゼンテーションでは、自己紹介、目的、ソフトの特徴、実用性をアッピィールしたのち、「5 分間デモをせよ。」ということも細かく指定されており、5 分間で何を見せるかについても出発前に大いに検討を重ねた。(1) 審査員は多くが欧米人である　(2) 日本人の大学生の英語学習について現状を伝えるのは困難　(3) 世界的に知られた映画で、色彩や音声的に判り易い場面でデモをしないと、ソフトウェアの特徴が判り難いなどから、デモ・シナリオを作成し、それ以前のプレゼンでデモへの期待を高めるように工夫をした。あえて日本のアニメ（となりのトトロ）を選択し、日本語と英語の音声＆字幕（サブタイトル）を途中で切り替えながら、日本語音声で英語字幕を見せ、英語音声で英語字幕有り・無しを見せることにした。これを決定するまでに、他のアニメを検討したり見せる場面を選んだり

と、さまざまな工夫を重ねた。

こうした十分な検討の末、ノート PC 3 台＋電源、携帯用外部スピーカーセット、映像出力切り替え機、LAN ケーブル、スライド・ファイル、発表用読み原稿などを準備して現地に入った。

3. 会場の下見と事前準備

平成 18 年にモーリシャスで開催された学会やその他数度の国際会議を通じて、(1) インターネット環境がとても貧弱なことがある　(2) プロジェクターが暗く映像が鮮明に見えないことがある　(3) 会場にカーテンが無く時間帯によってはスクリーンに光が射すといった日本では考えられない環境でプレゼンしなくてはならないことがあるということを経験していたので、ホテルへ着いて部屋に入るや否や（現地は 20 時で会場は閉まっていた)、PC を片手に会場のネットワーク状況・窓の様子などをチェックした。その結果、「無線 LAN は用意されているが、時間帯によってはほとんど日本のサイトへ接続できない。」ことが判った。これが昼間の発表時間帯の場合はどうか？　改めて翌日の昼間にもう一度チェックしなおすことにした。実は、ここからがさらにたいへんであった。

もし、公開中の Web サイトへ接続できないのであれば、全くデモはできない。しかし、かろうじて Web サイトに接続できるため、最初のページから目的のページ到達する（3 ページある）のに時間がかかり(場合によっては数分)、とても 5 分でデモをすることは困難である。また、Web サーバーと数秒おきに情報交換する我々の仕組みは、最初だけ閲覧できてもその後フリーズする可能性が高い。実際にテストをしてみたが、画面の切り替えなどは見せられないことが判った。そこで、急遽方針転換を行って、デモ用のシステムを現地で作り直すことにした。結局、数秒おきに情報交換する仕組みは機能を停止させ、デモではいきなり DVD を再生する場面から実施する（認証や教材データをダウンロードする様子は省く)。それまでのところは、順番待ちの時間中に長時間かけて実行しておき、ポーズをかけた状態で演台に運んでプロジェクターに接続するといった綱渡りをすることにした。また、最悪の事態に備えてローカル再生用ソフトウェアの作りこみと想定問答集の作成も行った。

こうした方針転換のため、スライドの作り直し、発表原稿の修正を余儀なくされ、昼食をする暇もなく発表練習を繰り返した。教室で授業を行う様子のデモはあきらめ、概念図で説明するなどの対策をし、ギリギリまで役割分担や時間調整を行って、午後 2 時からのコンペに間に合わせたのである。

4. 結果

結果的にこうした努力が功を奏し、審査員から多くの質問が出され、興味関心を引くことに成功した。他の多くの参発表者が、ネットワークの貧弱さを理由に、実際に操作せず、操作の様子をキャプチャしたビデオを再生して解説するといった安全策をとった。こうした中で、実際の操作にこだわった我々の努力が評価されたといえよう。“新規性、ユニーク性、実用性”などが高く評価され、2009 Best Software System Award を受賞することができた。審査員からは、「市販の映画 DVD でこんなことができるなんて信じられない！」「すばらしいソフトウェアだった。」「とても解り易かった。」など多数の称賛を得た。

共同発表者の野口氏は、「何度も国際学会の発表を経験したが、今日は体が震えるほど緊張した。すばらしい経験だった。」と今回の発表を評価した。小山氏も「画像切り替え機の電源が飛んだと言われたときは、頭が真っ白になった。」という感想をもらした。実は、すべてを徹底的にチェックしたはずだった

が、画像切り替え機の AC アダプターが、100 V オンリーだったことを忘れていたのだ。発表直前に機器のセッティングをした際に、一瞬電源が入った後に 240 V の電圧に耐えきれず壊れて動かなくなったのである。画像用ケーブルを直接差し替えて対応したが、最後まで 3 名が協力し合いながら、努力をし続けた結果受賞できた賞であり、決して 1 人では受賞することができなかったということを伝えたい。「最後まであきらめず、努力を惜しまないこと。」とても古めかしい、当たり前の文言であるが、今後も自らの座右の銘としつつ皆さんと共有したいと思う。

〈発表概要〉
1．目的
映画を楽しむうちにいつの間にか語学が学べる CALL
2．研究の位置づけ（先行研究）
・映画と字幕の効用
・CC 付き番組は学習者の学びの動機づけを促進する（Goldman and Goldman, 1988）
・CC 付き映画の中で用いられた口語コーパスを開発（佐藤，1996）
・サブタイトル付き映画 DVD によって目標言語の文化知識を同時に学ぶことができる（Kusumarasdyati, 2007）
3．課題
・映画の著作権問題
・CALL システムは教室に設置されているので自宅学習には使えない
・教師による学習条件の制御を可能化
4．実験授業
・タスクによる学習者のリスニング力改善を目指した
・Caption Master を利用するタスクにより英語学習への動機づけが高まることを検証
5．実験授業アンケートの結果
学習者は、授業・授業外を問わずかなりの量の課題を課したにもかかわらず、「他の映画もこの方法法で学びたい」と希望
6．システムの特徴とユニーク性
・著作権問題の解決
・教室での授業と自宅学習の連続的接続
・教師によるオーディオ、サブタイトル、チャプター単位再生　などの制御
・Web ページ上の教材と PC にセットされた DVD が同期再生される
7．革新性
・教師も学生もそれぞれが DVD を所持
・映画を用いた対話型言語学習は自己学習を促進する
・教室ではその場の学習者の学習状態を制御できる
・DVD 映画を用いた学習がいつでも、どこでも可能
8．まとめと今後の課題
・DVD 映画を用いた Web 上で利用する CALL システムを開発
・DVD を各人がそれぞれ所持することで著作権問題を解決した
・音声情報を Web 上で扱える（ロールプレイなど）仕組みを実現する予定

イタリア・オンブズ8サミットに参加して

桜　井　智恵子

2009年6月25–26日、オンブズ8サミット（O8）がイタリアのサルディーニャ島で開催された。G8の国々（カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、日本、ロシア、UK、アメリカ）から子どもオンブズの代表が集った。日本からは、川西市子どもの人権オンブズパーソンが、ユニセフと主催のヌーオロ州から招かれ、筆者が参加した。

筆者は、4年前にオンブズパーソンに就任し、子どもからもたらされたSOSをスタートに、学校と子どもをめぐる問題解決や、保護者と子どもの関係改善に週1回関わってきた。

会議の目的は、①G8サミットに渡す提言書を共同で作ること、②その内容をそれぞれの国内で市民に広く知ってもらうこと。

今年のG8の議題を受け、O8サミットのテーマは「経済危機」と「気候変動」の子どもへの影響だった。オンブズパーソンとしての国内の仕事紹介よりも、相談救済の実務の内外で、広く時代状況を把握し、子どもの最善の利益をどう位置づけ考えているのかという点が問われる会議だった。

出発前にO8サミットのテーマの課題整理をし、意見をまとめ、それを他2人の川西のオンブズパーソンたちと共有して、イタリアへ向かった。ユニセフからは、川西市の経験をできるだけ発信してほしいと要請を受け会議に臨んだ。

「経済危機」と「気候変動」の子どもへの影響

第一部では、「経済危機の子どもへの影響」が話し合われた。貧困は自己責任と考えられがちだが、構造的であり、G8を中心とした富める国により不平等が作り出されていると確認された。

日本では、子どもの貧困率が先進国の中で高く、それが親による子どもの将来に対する雇用不安をかきたて、さらなる教育不安が作り出されていること。それが、世界で最も孤独感の高い、日本の子どもの自己肯定感の低下につながっていると、データをもとに説明した。

第二部では、「気候変動の子どもへの影響」が話し合われ、私は司会を担当した。

温暖化ガス排出などによる、気温上昇、海面上昇、干ばつなどによる災害の8割が発展途上国で起きて

いること。もはや自然災害ではなく、「人災」だということ。また、先進国の消費量が、とりわけ北アフリカの気候変動に影響し、子どもを直撃していることが、専門家によって説明された。

目指す方向として、①適切な規制、②法整備、③一般の人々の意識を変えることとまとめられた。たとえば、環境をめぐる授業では、ひどい状況になっているという説明に留まらず、解決しようと思えば解決できる方法があると、具体的な提案を若い人たちに伝えることが重要と指摘された。

それを受けての議論では、発展途上国を抑圧しつつ成立している、先進国の消費量を減らすこと、成長を減速し、消費パターンを変え、産業構造を組み換えることが、子どもへの影響を改善することと共通認識した。

司会者まとめの中で私は、ライフスタイルの変容について、職人や小さな商店を積極的に守っている北イタリアの例を加えた。

子どもの声を代弁して制度改善に結ぶ

第三部では、「子どもの参加」について話し合われた。政策決定への子どもの参加－子どもを励まし、政治的な行動への参加を促すといった意見が述べられたが、私は、次のように話した。

川西の経験から、イベント的な「参加」よりむしろ、声を出しにくい子どもの声をオンブズが代弁することも「子どもの参加」の重要な構成要素であること。また、声を出しにくい子どもの気持ちを受け取るために、子どもとの信頼関係を築く時間と力量が必要であると述べた。子どもの声を代弁して制度改善に結ぶことができる。これは「子どもの参加」と第三者機関の役割でもある「制度改善」がつながる大切な視点だと、オンブズパーソンの仕事を重ねてきて、考えるからだ。

追って、「子どもは沈黙した市民」と、イタリアやドイツ、フランスも私の意見を補足してくれた。弱い立場の子どもを代弁するというオンブズの働きを知り、子ども自身が誰かの代弁者として力をつける方法も学ぶことにもなる。それは、人と人とが助け合うという価値を伝達する制度ともなる、と。

大騒ぎの提言書まとめ

二日間の会議の最後の仕事は提言書をまとめることだった。8カ国のオンブズパーソンたちが、文案が映し出されるプロジェクターの前に立ち、大騒ぎだった。「もっと強い言葉を！」「文化が異なる国々で、同様に『子どもが死んでいます』という言葉は使ってもいいだろうか？」など。

提言書は、次のように言葉を選びながら作り上げられた。少し紹介しよう。

> 「経済危機の影響も気候変動も、大人たち、先進国の開発過剰により行われ、その子どもへの影響は深刻です。それが世界的に充分理解されていません。家庭内暴力、虐待、搾取的な労働を強いられる青少年、格差の拡大、病的状態は、子どもへの経済危機の見えにくい影響の数々です。」
>
> 「状況は深刻です。子どもたちの命は、大人たちのせいで危機にさらされています。しかし、私たち大人は、経済危機と気候変動の子どもへの影響を改善するチャンスがあり、義務があります。」

パワフルな各国オンブズたち

会議の冒頭で、各国オンブズの機関紹介が短くあった。印象的だったのは、国や連邦オンブズが、法律

や政策提言に関する仕事が中心なのに対して、地方オンブズは、実務に政策提言に調査にと、さらに多様な仕事にチャレンジしていたこと。地方オンブズは、子どもと実際に出会い、彼らの声を代弁するということで、相談・個別救済の実際を、制度改善に結ぶ可能性があるという発見は、第三部で述べた通りだ。

勧告後の追跡調査をし、州政府に子どもの権利保持者であると受け入れさせる取組みをしているカナダ、国が子どもに対して必要な投資をしていないと意見書をまとめるアメリカ、政策の監視（モニタリング）を丁寧に行っているフランス、7 人のオンブズが州レベルで法律に影響を与えているとイタリア、子どもや若者に伝えるためネットの You Tube にサイトをもつ UK、83 地域の子どもオンブズをもつロシア、政府に向けてばかりではなく市民社会に向けての発信をとドイツ。

それぞれに明るく朗らかで、パワフルな代表オンブズパーソンたちとは、会議を終えてからも様々なお喋りをし、力づけられ帰国したのだった。

日本のこれからの方向性について、「まず経済が持ち直し金銭的な保障を」や環境のための新開発もいいだろう。しかし、強調しておきたいのは、私たちが見てこなかった、「減速」の発想だ。個人レベルの心がけではどうにもならない、煽られる消費や働き過ぎの歯止めだ。手元の問題を高度経済成長枠組のひずみとして捉え、ブレーキをかけ大きく発想を転換する、構造的な歯止めの必要性を、子どもたちの代弁者として伝えておきたい。

子どもを支える保育者や教職員になる学生のみなさんにも、成長減速の発想を共有し、そこに連なる「とりあえず、子どもの能力を伸ばす」という価値観には、充分注意を払い、子どもと出会う場で用いられてほしいと、私は願っている。